



## 神楽の保存・伝承

おおとも  
大友 ヒサエ

(89歳)

住所

平鹿郡大森町

昭和46年、保呂羽山波宇志別神社に伝わる霜月神楽が記録作成などの措置を講ずべき無形民俗文化財に指定されたことを契機に設立された「霜月神楽保存会」の会長として29年務め、神楽及び巫女芸能の保存伝承、後継者育成活動で常に中心的役割を担い、現在に至っている。

昭和52年に霜月神楽が国の無形民俗文化財に指定されると、全国からの問い合わせの窓口となり、全国に紹介する役目も果たすとともに、全国神楽大会、北海道・東北ブロック民俗芸能大会など、各地の神楽交流会に積極的に参加、永年にわたって神楽の普及・周知に努め、本県民俗芸能の振興に貢献している。



## 地域文化の振興・発展

く しま かつ し  
九 嶋 勝 司

(88歳)

住所

秋田市

昭和 26 年、福島県立医科大学に奉職した後、東北大学医学部教授を歴任し、昭和 45 年には秋田県民が待望していた秋田大学初代医学部長に就任して、創設時の研究・教育機能の整備充実に活躍されるとともに、さらに昭和 51 年には秋田大学長として、人材育成と本県の学術・文化の振興、産学協同の推進などに貢献した。

秋田大学退官後は、地域文化の発展のために構成された「ヒューマンクラブ」の会長として、機関誌「原点」を主な活動の場に、巻頭言の執筆など、広く県民・市民の生活、文化に関する問題点や未来のあるべき姿について提言するなどの文化運動を展開している。

また、会長として、県・市民の自由参加によるシンポジウムや公開講演会なども多数開催している。

さらに、秋田県が、全国に先駆けて提唱した生涯教育の主要な県民学習事業として、昭和 55 年、「秋田県コミュニティ・カレッジ」が開設されたが、氏は初代の学長に就任し、本県生涯教育の充実・発展に貢献している。



## 俳句の普及・発展

け しば むね お  
結 柴 宗 雄

(87歳)

住所

由利郡象潟町

昭和 27 年、象潟町「松風」俳句会、後に「潮騒」俳句会を創立して会長に就任し、俳句の普及発展に貢献している。

昭和 59 年、芭蕉で有名な名勝象潟の顕彰者として、奥の細道象潟全国俳句大会世話係及び芭蕉顕彰象潟案内を担当した。

昭和 63 年から平成 3 年まで秋田県俳句懇話会幹事を、平成 3 年から社団法人俳人協会秋田県支部副支部長、また平成 6 年から象潟全県少年少女俳句大会選者を務め現在に至っている。

また、象潟町文化財保護審議会会長、秋田県文化財保護協会理事、同象潟支部長、さらには、象潟町史編纂委員長、象潟町郷土史研究会会長に就任し、現在に至っている。



## 茶道、華道の普及・発展

さ さ き ア エ  
佐々木 ア エ

(81歳)

住所  
男鹿市

昭和30年、茶道・華道教室を開設し、昭和38年茶道遠州流男鹿支部を発会させ、今日まで会の指導育成に活躍している。

この間、昭和45年万国博覧会で茶席を担当したほか、昭和59年国際文化交流でオランダ・フランスを訪問し、茶会に参加し、平成7年には日韓親善交流で韓国を訪問するなど、日本の伝統文化の紹介に大きく寄与している。

また、昭和48年、平成元年の2回にわたり、茶道遠州流全国大会を男鹿市で開催したほか、日常的に中学校、高校、公民館及び企業内教育などの講師を務める傍ら、定期的に福祉施設などを慰問し、市民との意欲的な交流に貢献している。

さらに、平成6年には秋田県華道連盟の会長に就任し、毎年、秋田県華道展を開催しているほか、平成10年には秋田県華道連盟創立50周年を記念し、秋田県総合いけばな展・全国いけばな名流展を開催するなど、秋田県の茶道・華道の振興と普及向上に大きく貢献している。



## 保健衛生の普及・向上

ね の ひ しゅん いち ろう  
子 野 日 俊 一 郎

(81歳)

住所  
横手市

昭和 23 年、ネノヒ薬局を開設して以来、開局薬剤師として、一貫して、県民に有用な医薬品を供給するとともに、薬事衛生の知識の普及向上に貢献している。

昭和 35 年から秋田県薬剤師会理事、同副会長、秋田県医薬品小売商業組合理事長などを歴任し、薬局、薬店の資質向上並びに後進薬剤師の育成に貢献している。

昭和 45 年には「子野日奨学会」を設立し、若年者の育成に心血を注ぎ、秋田県の教育環境の改善に貢献するとともに、大雄村立 3 小学校、横手市立小学校、県立高校等の学校薬剤師を永年務め、児童生徒の健康管理及び学校環境衛生の向上に活躍している。

この間、俳句の世界においても、昭和 22 年、横手かまくら吟社に入会し、昭和 55 年、ホトトギス同人となっている。2 冊の句集を自己出版し、独自の世界を確立するとともに、平成 2 年、日本伝統俳句協会幹事として後継者の育成に努力し、文化の発展にも貢献している。



## 写真の普及・発展

しの だ よし かず  
篠 田 吉 一

(74歳)

住所  
秋田市

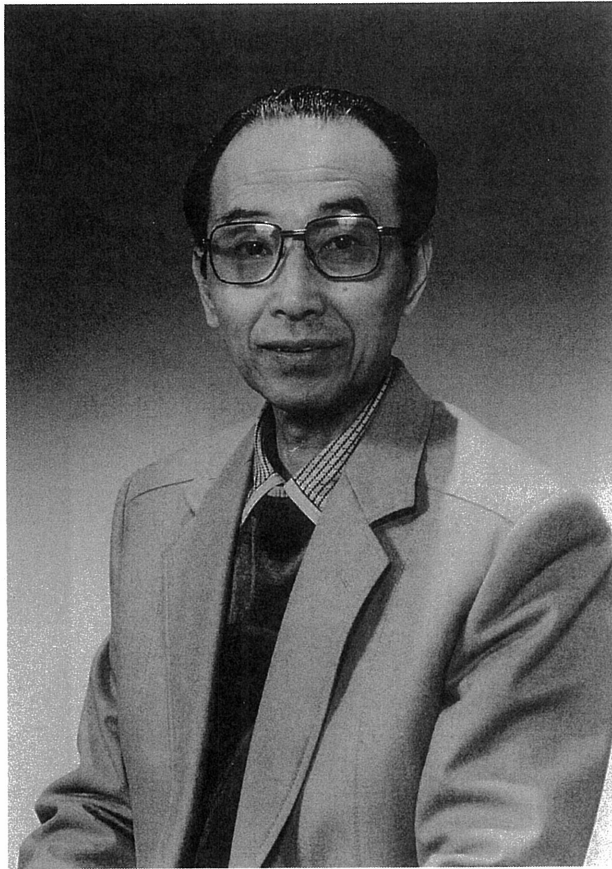
昭和45年、「秋田県写真協会」の設立に参画し、昭和55年からは会長、さらには平成9年から名誉会長として、アマチュア写真界をリードし、技術の向上や後継者の育成、機関誌の発行、公募展を企画するなど広く文化の振興に貢献している。

また、昭和63年から県内社会福祉施設に写真寄贈運動を呼びかけ、現在5,300枚を寄贈し、施設の人々や県民に心のやすらぎを与えている。特に、昨年完成した秋田赤十字病院の依頼にこたえ、写真・絵画760点を寄贈し、病院を訪れる人々や入院患者から感謝されている。

昭和56年から、市町村65団体、部門別34団体、会員83,000人を擁する「秋田県芸術文化協会」の副会長を務め、組織の強化、事業拡大に尽力する傍ら、平成6年から「秋田県芸術文化振興基金制度」の設立に奔走し、平成11年度に発足させた。

なお、平成9年から「秋田県芸術文化協会」の会長を務めるとともに、全日本文化団体連合会の副会長としても広く活躍している。





## 音楽の振興

故 <sup>かま</sup>鎌 <sup>だ</sup>田 <sup>のり さぶ ろう</sup>典三郎

(享年72歳)

住所  
東京都

終戦後、故郷である秋田に戻り、男鹿市の五里合小学校で教壇に立ち、地域の演芸会などでも音楽を披露したが、やがて、本格的な音楽に取り組むため上京することとなった。

当時の赴任地、西六郷は町工場が入り乱れ、働く両親を持つ鍵っ子が充満していた。この子たちに「澄んだ瞳を、感性豊かな出会いを」と「西六郷少年少女合唱団」を結成し、放課後音楽室で歌唱指導した。

合唱団は、地元でのコンサートのみならず、氏の故郷秋田へも巡回公演をし、地元の子供たちにも指導したり、秋田の民謡、童謡をレパートリーに入れたり和本県の音楽振興に貢献した。

また、日本海中部地震で帰らぬ人となった合川南小学校児童へ「十三のみたまのクイェム」を加茂青砂の慰霊碑の前で捧げた。

昭和56年には、全日本少年少女合唱連盟を設立して理事長に就任し、平成11年、病気で亡くなるまで音楽への情熱を燃やし続け、県民の心の支えとなった。



## 産業振興、経済の発展

はやし  
林

ぜん じ ろう  
善 次 郎

(71歳)

住所

秋田市

昭和 21 年、秋田魁新報社に入社後、重要なセクションを歴任し、平成 3 年には代表取締役就任を契機に、報道体質の強化を図ったほか、永年にわたり、世論の形成や文化、教育、スポーツなどに関するイベントの開催に積極的に取り組み、本県における地域振興及び経済の発展並びにスポーツ、教育、文化など様々な分野における水準の向上に貢献している。

この間、昭和 59 年から秋田県海外技術協力会会長をはじめ、秋田地域留学生交流推進会議など、国際交流を深める関連組織の執行部として国際社会に対応した各種事業の推進に努めている。特に、ワールドゲームズについては、氏が中心となって招致運動に精力的に取り組み、実現に至った。

また、昭和 54 年から秋田商工会議所商業活動調整協議会の副委員長として大型店進出問題の調整に尽力したほか、秋田経済同友会代表幹事、東北経済連合会理事などの要職を務め、東北地域全体の交流・提携による経済活動などに取り組んでいる。とりわけ県内経済人を結集し、「開かれた・行動する集団」としての秋田経済同友会の設立に関しては、まとめ役となって活躍した。